宙の果てで考えること

木村怜雄

路傍の石がまた跳ね上がってさ、
いつもの景色を蹴っ飛ばして
空へ空へ、何度も重なって昇っていくんだ
宙を泳ぐみたいに
まるで何かを探してるように。
そのたびに、周りにはいろんな色が集まって
まるで欲望が寄り集まって渦を巻いてるみたいでさ
明日なんてもう、遠い遠い水平線の向こう

夕暮れの光がちらっと見える頃には
全部が逸れて、歪んで、どこまでも自由になる
「そうか、これが悟りってやつかもな」
ふと、そんなことが頭をよぎる
会ったこともない誰かと巡り合って
確かめ合って、全部が解け合っていく
自分なんてものが、もうなくなっていく瞬間ってやつだ

そのうち、わたしも空の高いとこにいるんだろうか
弧の頂上にじっと結ばれた、一本の細い糸みたいに
過去も未来もぜんぶ一瞬に凝縮されて、
その場から動かない、動けない時が止まる瞬間
ただ、「ああ、これが成就なんだな」って
静かな気持ちで、全部がそこにある気がする

宙の彼方に浮かぶ鎮石みたいに、
心のど真ん中に構えて、
全ての音が静かに収まっていく

そんな安らぎもつかの間
気づいたらわたし、暗闇に向かってまた降りていくんだ
その途中でさ、何か触れるんだよ
まるで宙の温もりが手のひらに伝わってくるみたいに
遥か先の、見えない極みに向かって

そして路傍の石がいつもの景色を蹴り上げて、
不意に耳に届く声がある
命じる夢の外へ体を向けたわたしは
少しだけ微笑んでいたみたい
そのとき、何か言ったんだっけ？
言葉はどこからか現れて、
私の奥の、誰もいない静かな場所を
そっと通り過ぎていったのかもしれない